

自分が患者になったからこそ気づいたこと

病気になったとき、後悔しない選択を

がん専門医である私は、日頃がんの患者さんを「大丈夫です。一緒に治していきましよう」と励ます立場にあります。いろいろな患者さんと向き合ってきて、医師としてどうあるべきか、どのような医師が患者さんにとってよい医師であるかを考え続けています。

一方で、患者さんの抱く不安な気持ちや動揺も、とてもよく理解できます。なぜなら私自身も、がん患者になった経験を二度もっているからです。

一度目は4代のときでした。左太ももにできたしこりが、病理学的に見て5年生存率が50%とされている「悪性線維性組織球腫」という珍しいがんであることがわかったのです。そして二度目は、その6年後。血液のがんの一種であるMDS（骨髓

異形成症候群）を患いました。

おかげさまでどちらも治療が効いて、現在もこうして医師を続けることができています。けれども自分が重篤な病気になったことによって、それまで見えていなかったことがあるとわかったのです。

白状しますが、医師でありながら、自分ががんとわかったときはひどく狼狽しました。MDSとわかったときは、「もう治らないのだ」と落ち込み、うつ状態に近くもなりました。

患者さんがどのような不安や悩みを抱え込んでしまうか身をもって知ることができて、医師としての自分のあり方を振り返るきっかけになり、自分自身の生き方をどうするのかについて、本当の意味で考えてこなかったことも強く突きつけられました。そうした経験をしたことで、医師として今、ひとりでも多くの方が、病気になったとき、後悔しない選択をしてほしいと心から思っています。

病気になるということは、ある意味で自分の生き方を考えるきっかけになります。自分らしく生きるためにも、あとから「こうすればよかった」と思うことのないよう、治療を医師任せにせず、自分自身で選び取ることが大事ではないでしょうか。